

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集

十
万
遺
跡
Ⅱ

十 万 遺 跡 Ⅱ

高知県経済連 LP ガス容器検査所建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

九
九

・

三

(財)

高知県文化財団埋蔵文化財センター

1992・3

十 万 遺 跡 Ⅱ

高知県経済連 LP ガス容器検査所建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1 9 9 2 ・ 3

序

今日、我々の周辺環境に対する関心が高まって来ました。一つは自然環境に対するものであり、もう一つは歴史的環境に対するものであります。これは正しく、環境破壊の波に全てがさらわれようとする今、我々が何をなすべきか自覚し始めたからではないでしょうか。環境は、我々一人一人が努力しなければ守れない状況にあり、それを今行わなければ、取り返しのつかないことになる可能性をはらんでいます。

自然そして歴史的環境は、我々の日々の生活の中で人知れず関わるどころが大きく、とくにこれから世界をになうべき子供達に与える影響の測り知れないものがそこにはあります。今を生きる我々は、後世に向けてより多くの良質な環境を残してゆく義務があると考えます。

埋蔵文化財は、歴史的環境の範疇に入るものであり、このたび設立された財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターも、この歴史的環境の保護と埋蔵文化財への啓発活動を目的としており、その活動を通じて、地域の人々に環境に対する熟慮を促すことができると考えます。

本書に収めた『十万遺跡 II』は、1987年度の香我美町による十万遺跡発掘調査に引き続き香我美町山南地区の原始から中世にわたる歴史の流れを補完するものと考えられます。発掘調査を実施するにあたっては、高知県経済農業組合連合会、香我美町教育委員会、高知県教育委員会等の諸機関と地元住民の方々をはじめとする関係各位の協力を得ましたことを、ここに明記してお礼にかえさせていただきます。

平成4年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 小 橋 一 民

例 言

1. 本書は、高知県経済連LPガス容器検査所建設に伴う「十万遺跡」の発掘調査報告書である。1987年刊行の『十万遺跡発掘調査報告書』に続くものとして『十万遺跡 II』の書名を冠した。
2. 「十万遺跡」は、香美郡香我美町上分十万に所在し、1987年度に香宗川中小河川改修事業に伴い調査が実施されている。
3. 調査面積は300㎡であり、調査期間は、試掘調査を1991年9月19日に行い、本調査を1991年10月29日より同年11月25日まで行った。
4. 発掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが、高知県経済連の委託を受けて実施し、発掘業務は、山本哲也(埋蔵文化財センター第1係長)の指導のもとに藤方正治(埋蔵文化財センター調査補助員)が担当し、事務は三浦康寛(埋蔵文化財センター主事)が行った。
5. 本書の執筆・編集は、藤方正治が行った。また、測量には、近森泰子(埋蔵文化財センター調査員)の協力を得た。
6. 現場作業では、狩野孝子・別役美益・杉本認喜・湯本好美・馬地節子・片岡真弓・加納末雄・貞岡重道・濱田和成・井上速男・吉川勉諸氏の協力を得た。また、本書の作成においては、大原喜子・中西純子・山中美代子・吉本睦子・松木富子諸氏の協力を得た、明記して感謝の意を表したい。
7. 出土遺物及び調査資料は高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。尚、注記は91-14JMである。

報 告 書 要 約

1. 遺 跡 名 十万遺跡 遺跡番号 180031 遺跡地図 №.19 - 167
2. 所 在 地 高知県香美郡香我美町上分字十万
3. 立 地 香宗川左岸、舌状丘陵地縁辺部 標高約 14m
4. 種 類 弥生時代、奈良時代、室町時代
5. 調査主体 (財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
6. 調査契機 高知県経済連 LP ガス検査所建設
7. 調査期間 平成3年10月29日～同年11月25日
8. 調査面積 300 m²
9. 検出遺構 (奈良時代) S B 2 棟、(近世) S K 5 基
10. 出土遺物 (弥生時代) 甕、高杯、(須恵器)甕、(土師器)高杯、杯、皿、鍋、羽釜、(備前焼)壺、
(白磁) 皿
11. 内容要約 弥生時代の遺構は検出されず、弥生土器の破片が多く出土する。前回の調査で検出された古代の掘立柱建物群と同時期の掘立柱建物を、部分的にはあるが2棟検出する。うち1棟の規模は現状で4×2間であり、東側に廂を持つものである。中世の出土遺物は主に調査区北部の遺物包含層からであり、調査区東部で検出した土壌基群は近世のものと考えられるが、出土遺物は殆どない。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の経過及び方法	6
第Ⅳ章 調査の成果	
1. 基本層序	8
2. 検出遺構	12
3. 出土遺物	19
第Ⅴ章 まとめ	21

挿 図 目 次

Fig. 1	周辺の遺跡分布図	2
Fig. 2	調査区位置図	5
Fig. 3	調査区グリッド設定図	7
Fig. 4	西壁・南壁セクション図	9・10
Fig. 5	調査区全体図	11
Fig. 6	S B - 01 平面図	13
Fig. 7	S B - 01 柱穴平面図及び断面図	15
Fig. 8	S B - 01、02 柱穴平面図及び断面図	16
Fig. 9	S K - 01 ～ 05 平面図及び断面図	17
Fig. 10	遺物出土状況図及び垂直分布図	18
Fig. 11	出土遺物実測図	20

写真図版目次

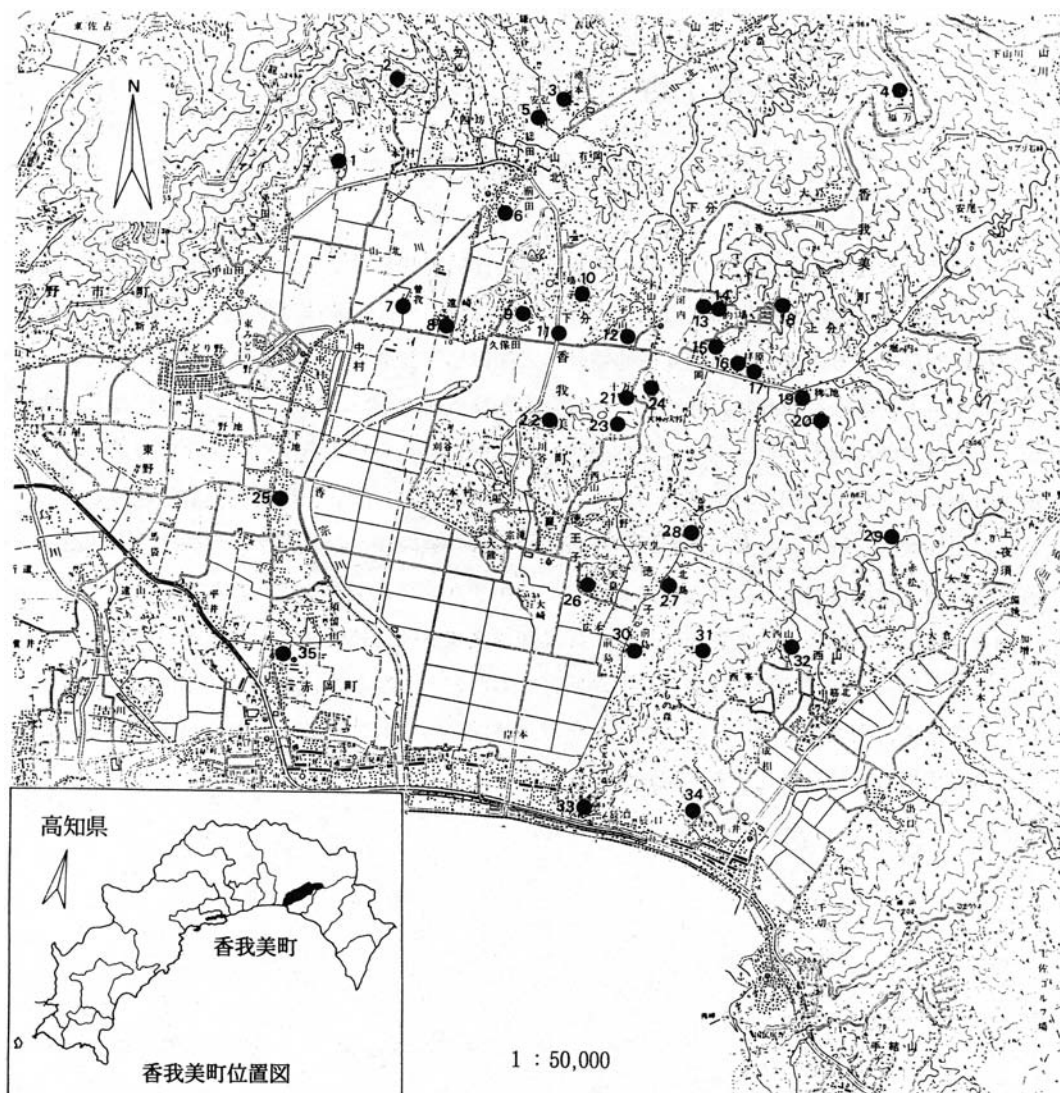
- P L. 1 上 : 西壁セクション
下 : 南壁セクション
- P L. 2 上 : S B - 01 (北より)
下 : S B - 01 (南より)
- P L. 3 上 : S K - 04 セクション
下 : S B - 01 P 2 柱根
- P L. 4 上 : S B - 01 P 1 セクション
中 : S B - 01 P 2 セクション
下 : S B - 01 P 3 セクション
- P L. 5 上 : S B - 01 P 4 セクション
中 : S B - 01 P 5 セクション
下 : S B - 01 P 7 セクション
- P L. 6 上 : S B - 01 P 8 セクション
中 : S B - 02 P 1 セクション
下 : S B - 02 P 2 セクション
- P L. 7 上 : S K - 01
中 : S K - 02
下 : S K - 03
- P L. 8 上 : 調査区全景 (北より)
下 : S K - 01 ~ 05
- P L. 9 上 : 調査区全景 (東より)
下 : 発掘調査風景
- P L. 10 出土遺物写真図版

第Ⅰ章 調査に至る経過

十万遺跡は、1987年に香宗川中小河川改修工事に伴い香我美町による発掘調査が行われ、縄文時代晩期終末の土器、弥生時代後期後半の堅穴住居跡、古代官衛に関する役人の館跡と倉庫跡、中世の居館跡である周溝を持つ掘立柱建物跡などを検出した遺跡である。

香我美町上分字十万で高知県経済連LPガス容器検査所の建設が計画され、この建設予定地が十万遺跡の隣接地であり、工事による遺跡への影響が考えられることから、保存についての協議が行われた。特に前回の発掘調査の後、LPガス基地建設に際し、埋蔵文化財包蔵地であることの周知徹底が行われなかったため、部分的に遺跡の破壊が行われたが、今回は、高知県経済連の埋蔵文化財に対する理解と協力を得ることができ、発掘調査が行われる運びとなった。

調査は、高知県経済連の委託を受けて、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施することとなり、1991年9月19日に埋蔵文化財が残存するかどうかの確認を目的とする試掘調査を行った。その結果、当該地においては、埋蔵文化財が破壊から免れていることが判明したため、LPガス容器検査所建設に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。



No.	遺 跡	時 代	No.	遺 跡	時 代	No.	遺 跡	時 代
1	大崎山古墳	古 墳	13	幅山古墳	古 墳	25	香 宗 城	中 世
2	富 家 城	中 世	14	幅山遺跡	弥 生	26	徳善天王古墳	古 墳
3	城 山 城	〃	15	岡 城	中 世	27	徳王子古窯址群	古 代
4	福 万 城	〃	16	拝原城	〃	28	螢野古墳	古 墳
5	安弘遺跡	弥 生	17	拝原遺跡	縄文～中世	29	ノッゴ古墳	〃
6	前田城	中 世	18	的場遺跡	弥 生	30	徳 善 城	中 世
7	東曾我遺跡	弥生～中世	19	稗地遺跡	中 世	31	西峰の砦	〃
8	下分遠崎遺跡	弥 生	20	岩 神 城	〃	32	野神古墳	古 墳
9	中 城	中 世	21	十万遺跡	縄文～近世	33	姫倉城	中 世
10	鳴子古墳	古 墳	22	国吉城	中 世	34	梶ヶ山古墳	古 墳
11	鳴子遺跡	古墳～古代	23	十 万 城	〃	35	須留田城	中 世
12	河内遺跡	古墳～中世	24	東 十 万 城				

Fig. 1 周辺の遺跡分布図（上）分布表（下）

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

香我美町は、高知県の中央部、高知平野の東端に位置する。町域の東部は山間部であり、西部は物部川・香宗川が織り成す沖積平野である。北端に物部村・香北町・土佐山田町との町界となる三宝山山系があり、これは仏像構造線に平行して東西走る尾根である。即ち、地質的に香我美町の町域は主に四万十帯北帯に属する。町域の東部から舌状に延びる幾つかの尾根は、西に向うに従い標高を下げてゆき、香宗川とその支流が形成する川岸段丘と重る。これらの尾根は、冬季には北西の季節風、夏季及び秋季には台風等による南東風の影響から、谷間に形成された住民の糧となる田畑及び生活の場である家屋を守るに最適の環境を造っている。

十万遺跡は、町域の西南部、香宗川と山南川の合流点のやや下流南岸に位置し、東方の月見山山系に繋る丘陵の縁辺、標高14mに存在する。

2. 歴史的環境

縄文時代のものとして、前回の十万遺跡発掘調査で晩期の浅鉢を出土している。弥生時代の遺跡としては、香宗川下流域の下分遠崎遺跡が上げられる。ここは、1988年に調査が実施されており、多量の弥生土器に加え、石器、木製品、動植物遺体などが出土しており、前期から中期前半にわたって営まれた集落であることが判明している。また、この遺跡からは、在地土器生産に関わる粘土や土坑も検出されている。香宗川流域の丘陵上には、太形蛤刃石斧や竜河洞式土器を出土した的場遺跡が存在し、中期後半の遺跡と考えられている。後期終末の幅山遺跡では、3基の小児用甕棺が出土しており、集落周辺の墓域と推定されるものである。また、山南川流域では、後期後半から古墳時代にかけての住居跡を検出した拝原遺跡なども存在しており、縄文時代から古墳時代において、この地域に生活した人々の痕跡が、最近の調査によって明らかにされ始めている。

古墳時代の遺跡としては、5世紀の徳善天皇古墳が存在しており、勾玉・管玉・古鏡の出土があったものとされている。6世紀以降の古墳には鳴子・蛍野の両古墳が知られており、前者からは管玉・甕玉・直刀が、後者からは須恵器・石斧・鉄鏃が出土している。また、7～8世紀の徳王子古窯址群では、3基の窯跡が確認されており、須恵器窯・瓦窯として使用されていた。

古代において高知県域には、幡多・吾川・土佐・安芸の四郡と、承和八年（841）の『続日本後紀』に見える新設の高岡郡や長岡・香美の両郡を加えた七郡が存在し、現在に至る。遺跡の存在する十万周辺は、『土佐州郡志』によれば大忍郷に含まれる。前回の十万遺跡の調査では、方形掘方を持つ掘立柱建物群と住居域を画すとみられる溝が検出されている。この溝から

は、石鐙が出土しており、豪族の居館跡ではないかとされている。この居館を中心とした集落が条里の影響を受けたものかどうかを示す遺構の検出はなかったものの、中世『安芸文書』の大忍庄に関する文書には、条里呼称法の名残が見られることから、条里地割の施工を窺い知ることができる。

中世になると、当地域は大忍庄に含まれる。大忍庄は鎌倉時代初期に成立したものと考えられており、中期には北条氏の支配下にあった。その後、有栖川家領を経て、観応3年（1352）には土佐守護細川氏の熊野神宮料所であった。

大忍庄の内部には、東川末延名や西川行宗名といった多くの名が存在し、これらの名主による活動は活発であり、やがて清遠名や末清名といった脇名を生む。前回の調査で検出された中世の掘立柱建物群と溝は、この時期の住人の活動を明示するものであり、外堀と内堀を持つ方形館の遺構と考えられている。

戦国時代になると、各名主の系譜を引く土豪が乱立し、十万周辺においても十万城跡や東十万城跡が存在する。『長宗我部地検帳』によると、十万城の城主は十万美濃守・田中喜助であり、東十万城の城主は長谷川大上である。十万城は今回の調査区南方の丘陵上に位置しており、その麓の小字神母西^{イゲニシ}には、土居屋敷があったとされている。

参考文献

地理的環境及び歴史的環境を通じて

1. 『香我美町史（上巻）』 香我美町史編纂委員会 1985年
2. 『高知県の地名』 角川書店 1986年

地理的環境について

3. 日本の地質「四国地方」編集委員会 『日本の地質8 四国地方』 共立出版 1991年

歴史的環境について

4. 『図説 高知県の歴史』 河出書房新社 1991年
5. 『曾我遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989年
6. 『十万遺跡発掘調査報告書』 香我美町教育委員会 1987年
7. 『下分遠崎遺跡（I）』 香我美町教育委員会 1989年
8. 出原恵三 『拝原遺跡発掘調査説明会資料』 香我美町教育委員会 1991年

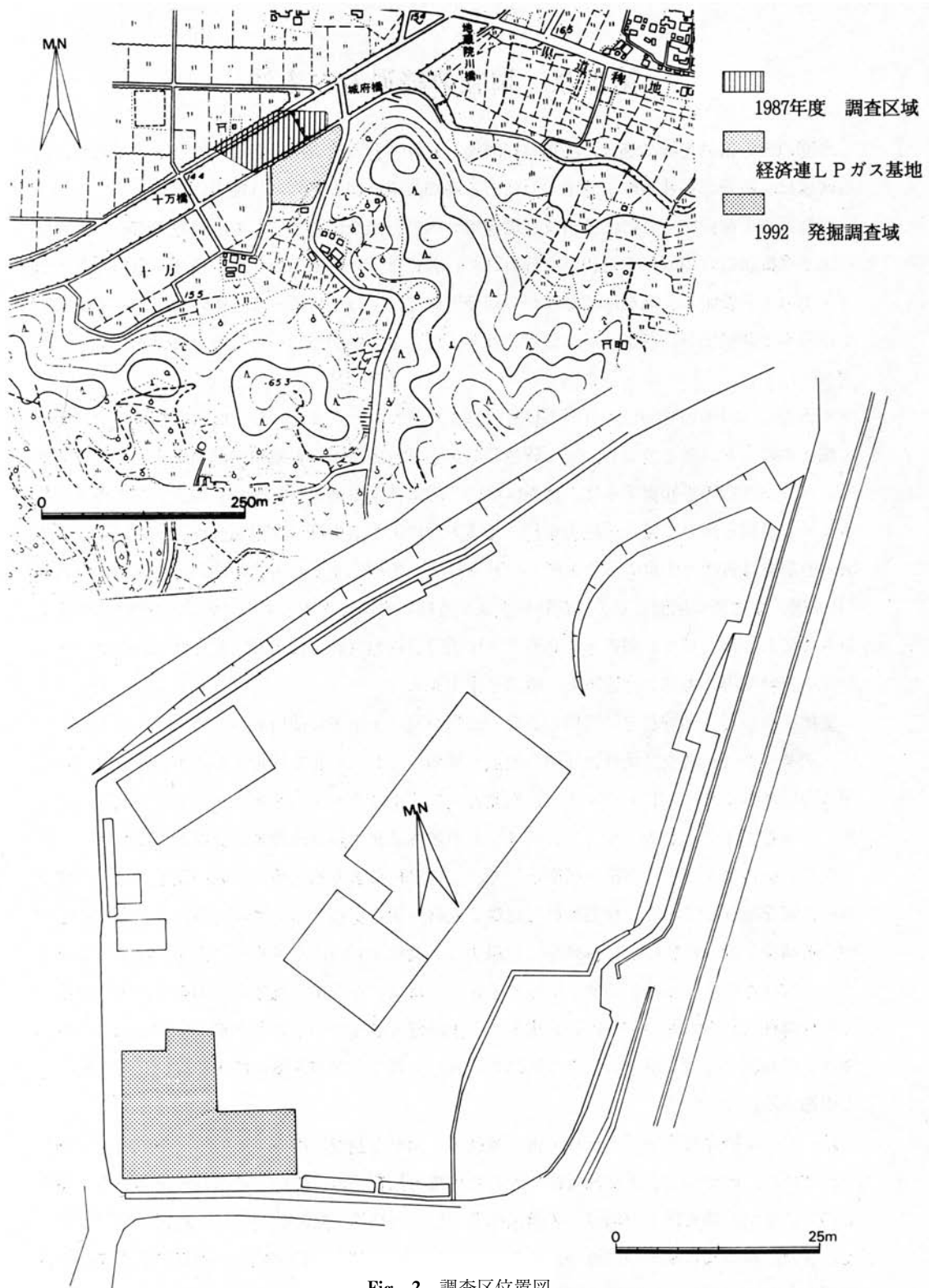


Fig. 2 調査区位置図

第三章 調査の経過及び方法

今回の十万遺跡発掘調査は、高知県経済連LPガス容器検査所の建設に伴うものであり、調査区域は、香美郡香我美町上分字十万にある高知県経済連LPガス基地内に存在する。

発掘調査の前段階として、遺構及び遺物包含層の有無を確認するため、香我美町教育委員会による試掘調査が1991年9月19日に行われた。調査は調査対象地の北部、西部、東部に各々2×2mのTP設定し、層を確認しながら掘り下げて行く方法によった。その結果、西部のTPで柱穴を1個検出し、各TPから細片ではあるが弥生土器が出土したことから、本調査を行う運びとなった。

本調査は1991年10月29日より同年11月21日まで行われた。まず、調査区の南端と西端に沿って幅2mのトレンチを設定し、層を確認しながら試掘調査による遺構検出面まで掘り下げて行く。トレンチ壁等を観察するに、調査区域内一様に盛土が地表下60cm余りに達すると考えられるため、重機を用いて盛土の除去を行った後人力による遺構等の検出を行う。その結果、調査区の西部では古代と中世のものと考えられる柱穴群を検出する。古代の柱穴は、暗褐色粘質土（Ⅱc層）を遺構検出面とし、黒色粘質土（Ⅴb層）を埋土とするもので掘立柱建物を構成するものであった。また、調査区の北部では中世の遺物包含層を検出し、破片ではあるが14～15世紀の資料を得、東部では近世の土壌墓を検出する。

遺構検出作業と平行して、遺構の測量や遺物の取り上げ等に使用するためグリッドを設定する。グリッドは、調査区域外の任意の地点を基準点とし、磁北を基軸として展開するもので、東西方向に東よりA・B・C・・・、南北方向に北より0・1・2・・・の各々で区切られる4×4mを1単位とする。そして、グリッドの名称は北東隅に位置する交点番号で行う。

次に、交点に設けられた杭を基準として、主に平板による遺構検出状態の測量を行い、埋土等の情報を記録しておく。検出された遺構の性格を明らかにするために、断面等を参考としながら遺構を半截の状態にし、写真等に記録する。遺構からの出土遺物は、出土状況で写真撮影をし、図面を作成した後、分類して取り上げる。遺構に伴う出土遺物は、調査区西部で検出した古代の柱穴からのものが多く、弥生土器と土師器の破片である。各遺構の完掘状態を写真に撮り、平面図を作成し各々の地点の標高を記入しておく。調査区域の検出遺構を全景写真として撮影する。

続いて、下層の調査を行うため、再び調査区の南壁と西壁に沿ってトレンチを設定して掘り下げてゆく。西壁の地表下80cmで検出された黒褐色粘質土は、断面に遺構状の落ち込みを持つものであるが、調査区中央部分での検出作業では、遺構等の拡がりを確認することはできなかった。また、新たな遺構や包含層の検出もなかったため、調査区の南壁及び西壁の断面を標準的な層序として記録し、各層の性質等も観察して記入する。

最後に、調査作業に伴う排土等を整地し、調査を終了する。

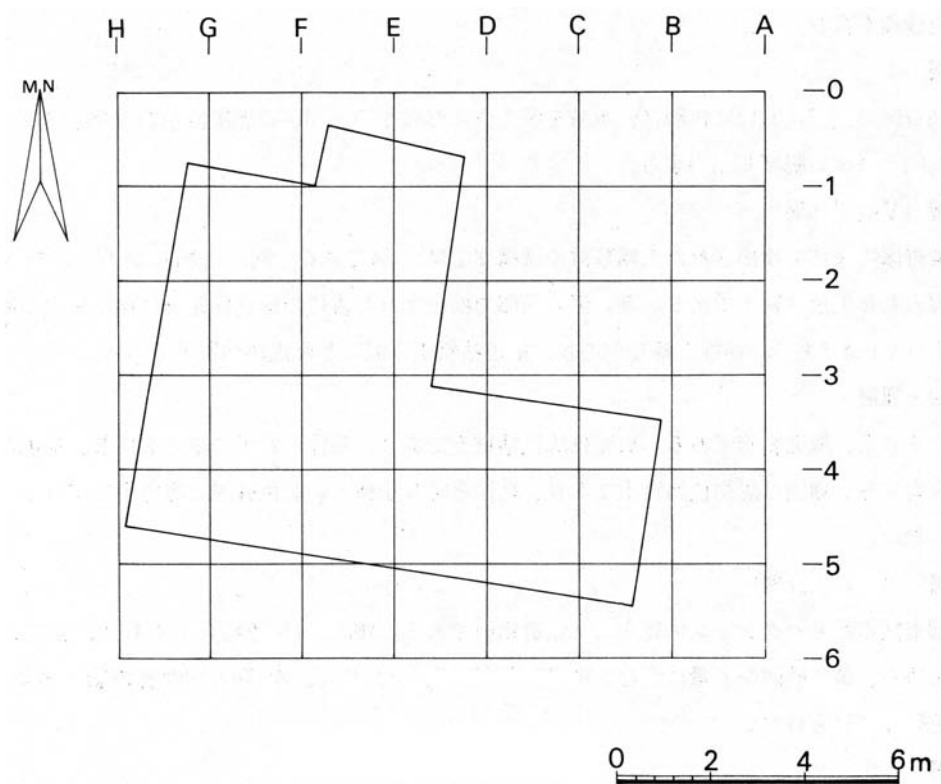


Fig. 3 調査グリッド設定図

第Ⅳ章 調査の成果

Ⅰ．基本層序 (Fig. 4)

Ⅰ層 (Ⅰa、Ⅰb層)

調査区の東部で近世の土壌墓群を検出したのはⅠ層の上面である。Ⅰ層はⅠa層とⅠb層の2層に細分され、Ⅰa層は黒褐色粘質土であり、Ⅰb層はⅠa層より色調のやや明るい暗灰褐色粘質土である。いずれも、粘性と締りがあり、乾燥すると堅緻である。

Ⅱ層 (Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc、Ⅱd、Ⅱe層)

Ⅱ層はⅡa層からⅡe層の5層に細分される。Ⅱa層は灰色粘質土、Ⅱb層、Ⅱc層、Ⅱd層、Ⅱe層は共に暗褐色粘質土であるが、Ⅱc層はⅡb層よりもやや砂質が強く、Ⅱd層は更に砂質が強くなる。いずれも、粘性と締りがあり、特にⅡa層、Ⅱb層、Ⅱc層では黄色砂礫を多く見る。調査区の西部で古代から中世の遺構を検出したのはⅡc層の上面である。

Ⅲ層

調査区南壁セクションに見られた無遺物層であり、暗褐色粘質土である。粘性と締りがあり黄色砂礫を含む。

Ⅳ層

調査区の西壁においてⅣ層は、水分を多く含んだ層厚15～20cmの黒褐色粘質土層であるが、東へ向うに従い肥厚し乾燥する。

Ⅴ層 (Ⅴa、Ⅴb層)

調査区の東部で検出された土壌墓群の遺構埋土はⅤa層である。粘性と締りがあり、褐色土の混入した黒色粘質土である。調査区の西部で検出された古代の掘立柱建物に伴う柱穴の遺構埋土はⅤb層である。粘性と締りがあり、褐色粘質土の混入した黒色粘質土である。

Ⅵ層・Ⅶ層

いずれも、無遺物層である。Ⅵ層は灰色粘質土であり、粘性と若干の締りを持ち、褐色の斑点を有する。Ⅶ層は黒褐色粘質土であり、粘性と締りを持ち、黄色砂礫と黒色土をブロック状に含む。

Ⅷ層 (Ⅷa、Ⅷb層)

調査区の西壁セクションに見られた無遺物層である。Ⅷa層は灰色粘質土であり、粘性と締りを持ち、黄色砂礫を多量に含む。Ⅷb層も灰色粘質土であり、Ⅷa層と同性質の層であるが、黄色砂礫は見られない。

Ⅸ層

Ⅸ層は中世の包含層と遺構埋土に相当する。暗灰色粘質土であり、粘性と締りを持ち、黒色粘質土をブロック状に含み、土師器の細片を含有する。

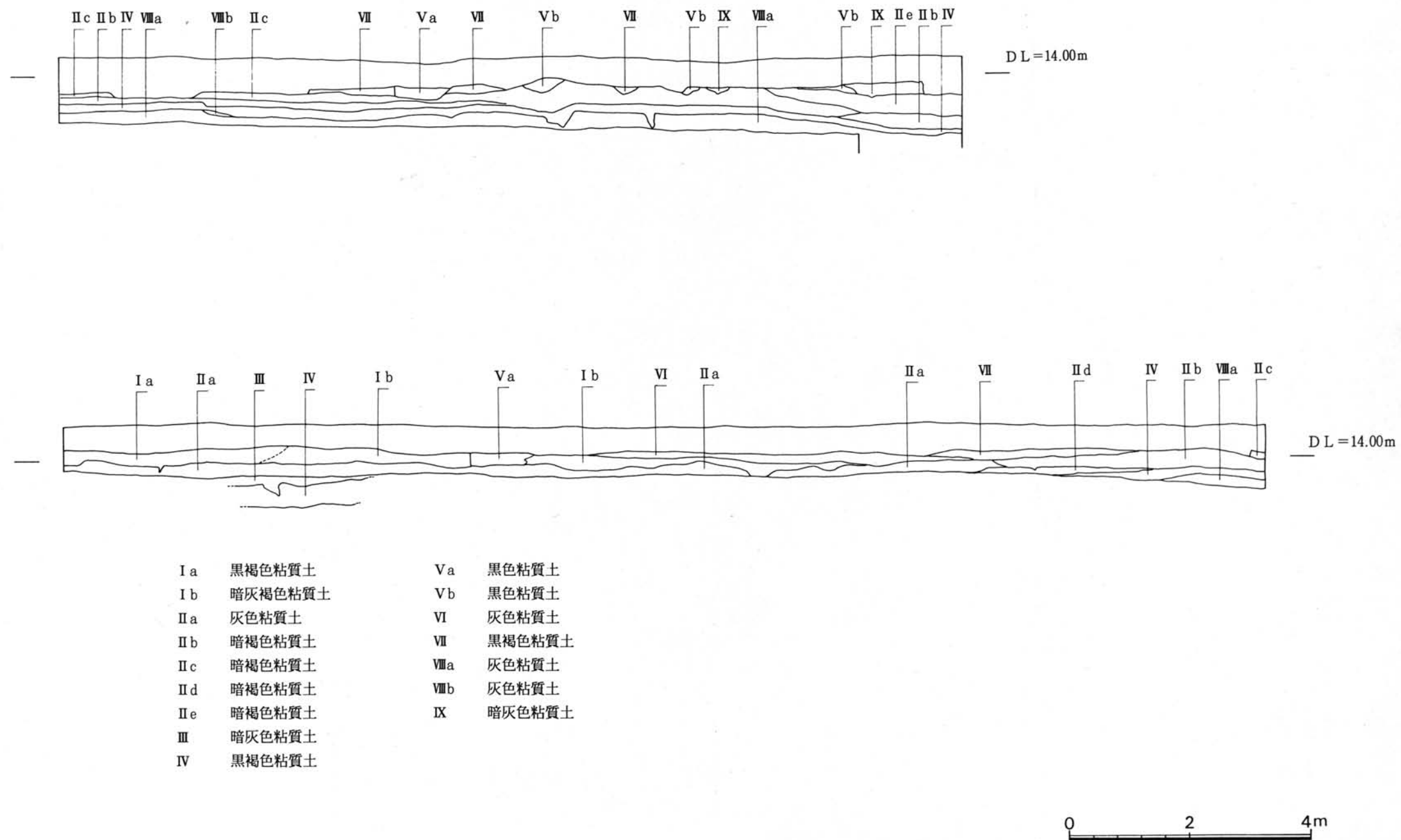
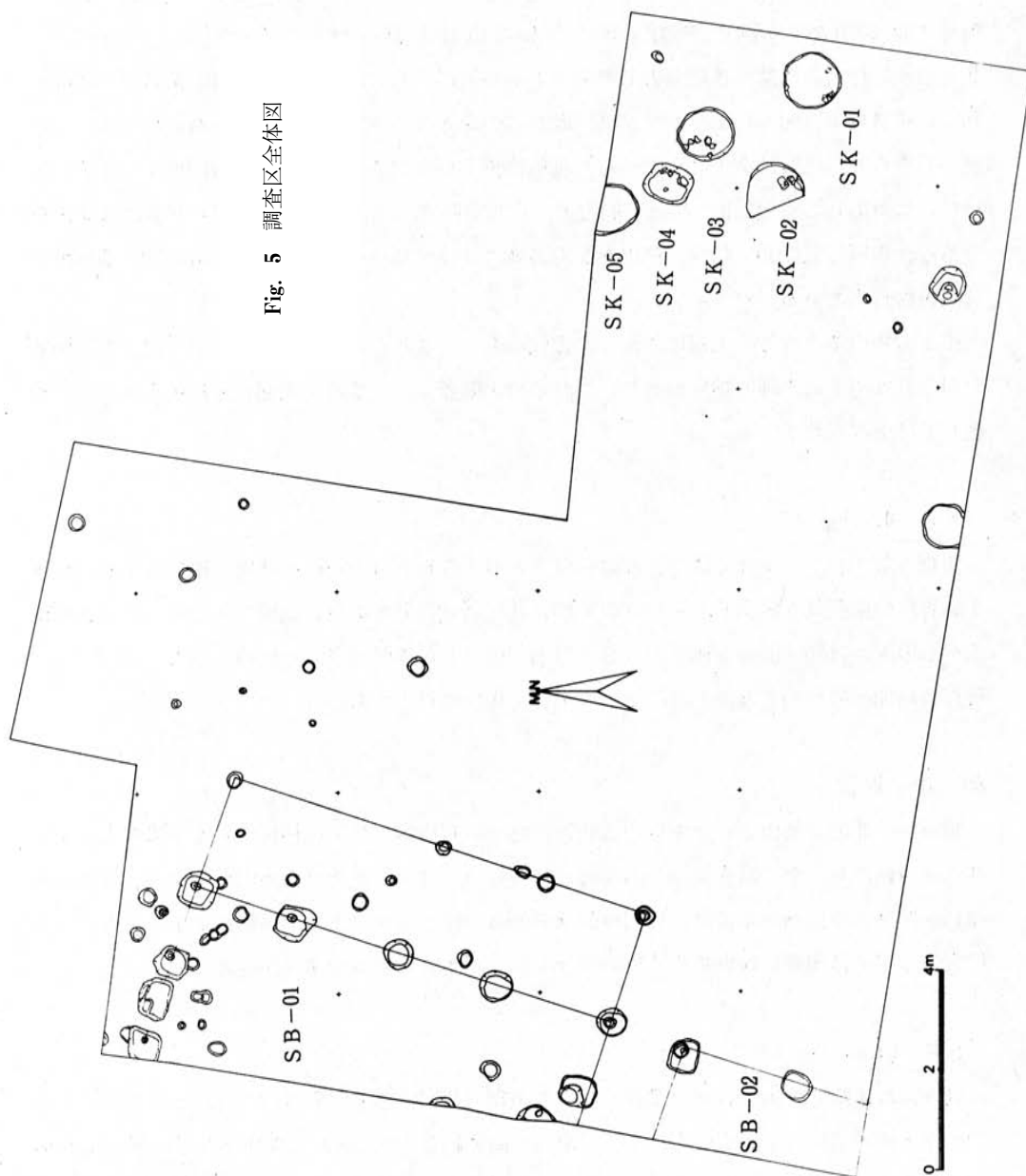


Fig. 4 西壁・南壁セクション図

Fig. 5 調査区全体図



2. 検出遺構

(1) 古代

S B-01 (Fig. 6・7)

調査区の西部に位置し、今回の調査では建物跡の約半分を検出したに過ぎない。柱間距離は桁行4間(8.70m)を測り、確認できた梁間は2間(3.30m)である。又、棟方向はN - 19.1° - Eを示す。柱穴の形態には隅丸方形のものと不整円形のものがあり、規模は、前者が一辺60～75cm、後者は半径60～70cmであり、検出面からの深さは35～55cmを測る。それぞれの柱穴に柱痕が見られる。柱痕は黄色砂礫を含んだ灰色粘質土から成り、直径約20cmの円形を呈する。桁行柱穴に対応して東側2.20mには、廂と考えられる柱穴列が存在する。柱穴の形態はほぼ円形であり、規模は直径30～40cm、検出面からの深さは15～30cmを測る。S B-01に関する遺構埋土は黒色粘質土である。

出土遺物の多くは弥生土器片であり、古代のものとされる遺物としては、P 6出土の土師器の皿とP 5出土の土師器細片がある。これらの土師器は、いずれも表面に赤褐色のスリップを施して仕上げられている。

S B-02 (Fig. 8)

建物としてのプランは確認できなかったものの、S B-01の桁行の柱穴に連なる2個の柱穴を調査区の南西隅で検出する。柱穴の形態は共に隅丸方形であり、規模は一辺55～65cm、検出面からの深さは20～60cmを測る。S B-01と同様に黄色砂礫を含んだ柱痕を持ち、P 2では、残存長約60cmの柱根を検出した。遺構埋土は黒褐色粘質土である。

(2) 中・近世

調査区の北部で検出された中世の遺物包含層であるⅨ層（暗灰色粘質土）を遺構埋土とする柱穴は24個あり、全て調査区の北西部分に存在した。柱穴の形態はほぼ円形であり、規模は直径15～35cm、検出面からの深さは10～20cmである。出土遺物は土師器の細片が主である。この柱穴群の中では明確に建物等構造物のプランを確認することは出来なかった。

S K-01 (Fig. 9)

調査区の東部で検出された土壇墓群の中で東端に位置する。形態は、ほぼ円形であり、平らな底部と斜めに立ち上がる壁を持つ。規模は、直径約1.1mであり、検出面からの深さは20～25cmを測る。壁際に15～20cm大の河原石が5個見られる。遺構埋土は黒褐色粘質土であり、出土遺物は皆無である。

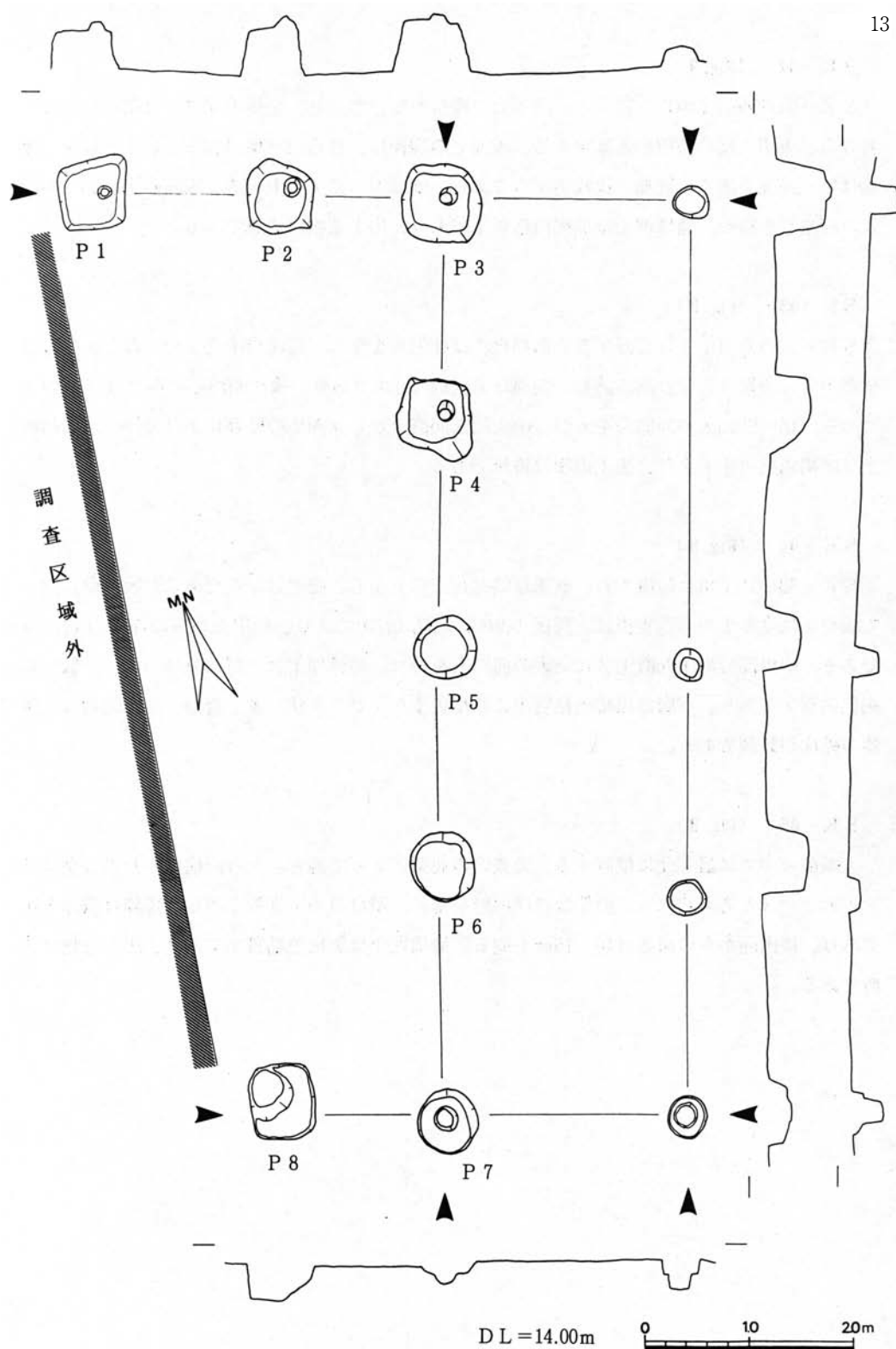


Fig. 6 SB-01 平面図

S K-02 (Fig. 9)

S K-01の西約2mに位置する。西半分は攪乱を受けており、全体のプランは明らかでないものの、東西に長い楕円形と推定する。現況での規模は、長径1.1m、短径0.9mであり、深さは15～25cmを測る。底部は比較的平らであり、壁は斜めに立ち上がる。床面直上に25～30cm大の河原石を持つ。遺構埋土は黒褐色粘質土であり、出土遺物は皆無である。

S K-03 (Fig. 9)

S K-02の北東1mに位置する。形態は、ほぼ円形を呈し、底部の中央でやや窪む。掘方は壁際から二段掘りとなり落ち込む。規模は直径約1.1mであり、検出面からの深さは15～20cmである。15～20cm大の河原石を6個、中央部床面直上から北西部の壁際にかけて持つ。遺構埋土は暗褐色粘質土であり、出土遺物は皆無である。

S K-04 (Fig. 9)

S K-02の北1mに位置する。形態は隅丸長方形を呈し、底部は平らであるが狭く壁に向けて緩やかに立ち上がる。規模は、長径0.9m、短径0.7mであり、検出面からの深さは約25cmである。中央部分の床面直上に10cm大の河原石を持つ。遺構埋土は2層に分けられ、上層は黒褐色粘質土であり、下層は黒褐色粘質土に明褐色土をブロック状に多く含む。出土遺物は土師器の細片が数個である。

S K-05 (Fig. 9)

土壙群の中では最も北に位置する。調査区の北壁によって遮られ、今回検出したのは全プランの約2/3と考えられる。形態はほぼ円形を呈し、壁は斜めに立ち上がる。規模は直径1mであり、検出面からの深さは10～15cmを測る。遺構埋土は黒褐色粘質土であり、出土遺物は皆無である。

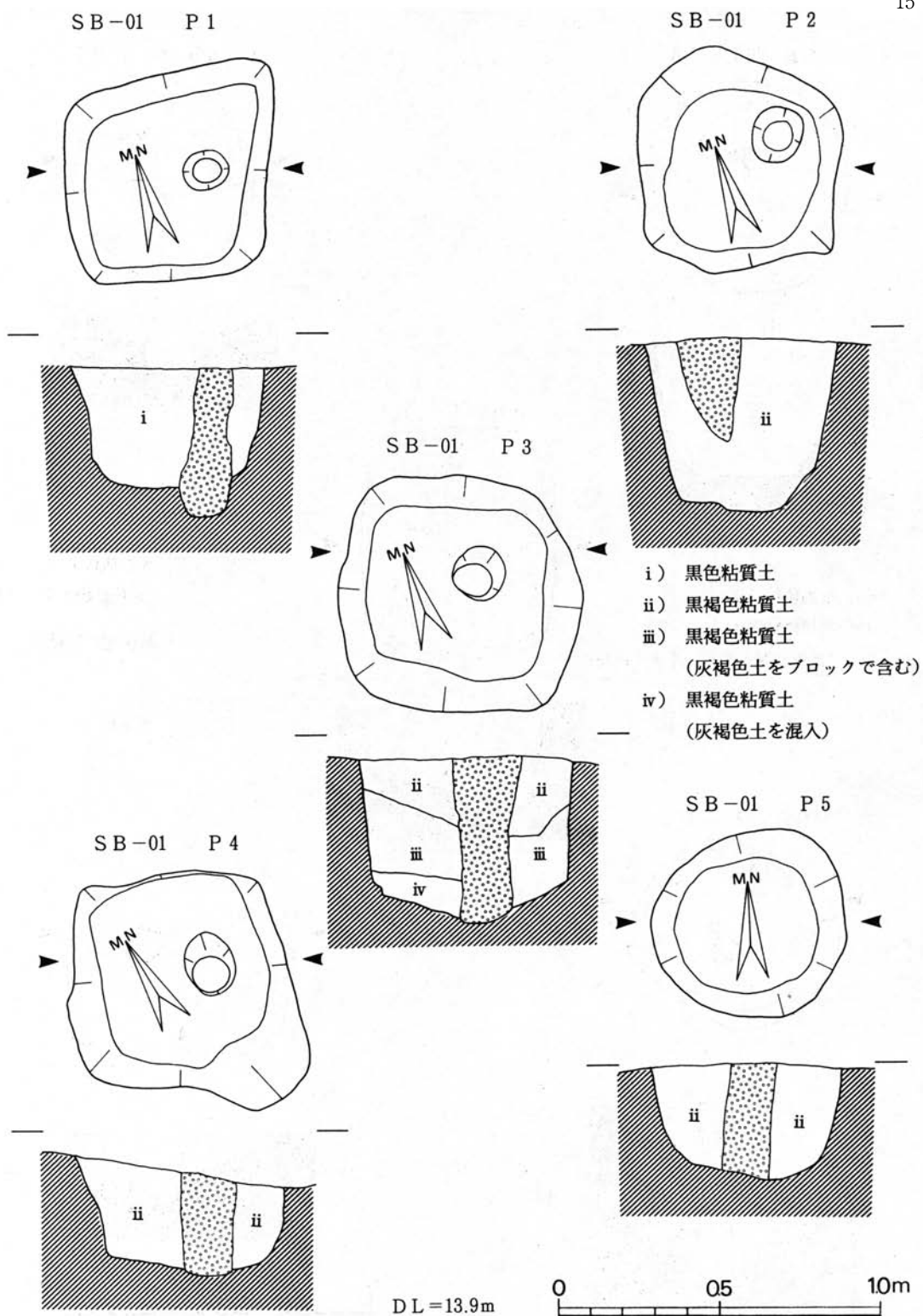


Fig. 7 SB-01 柱穴平面図及び断面図

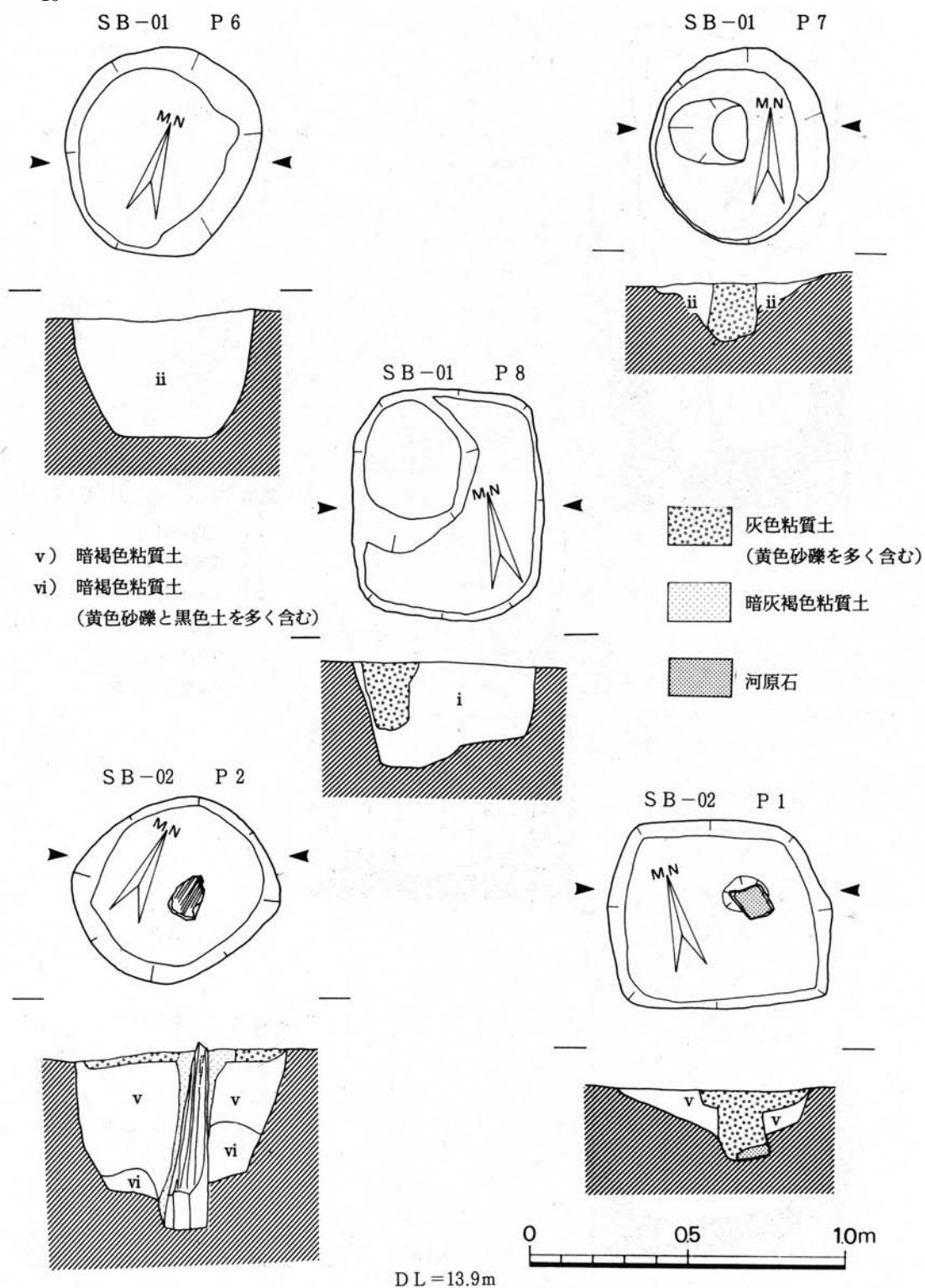


Fig. 8 SB-01, 02 柱穴平面図及び断面図

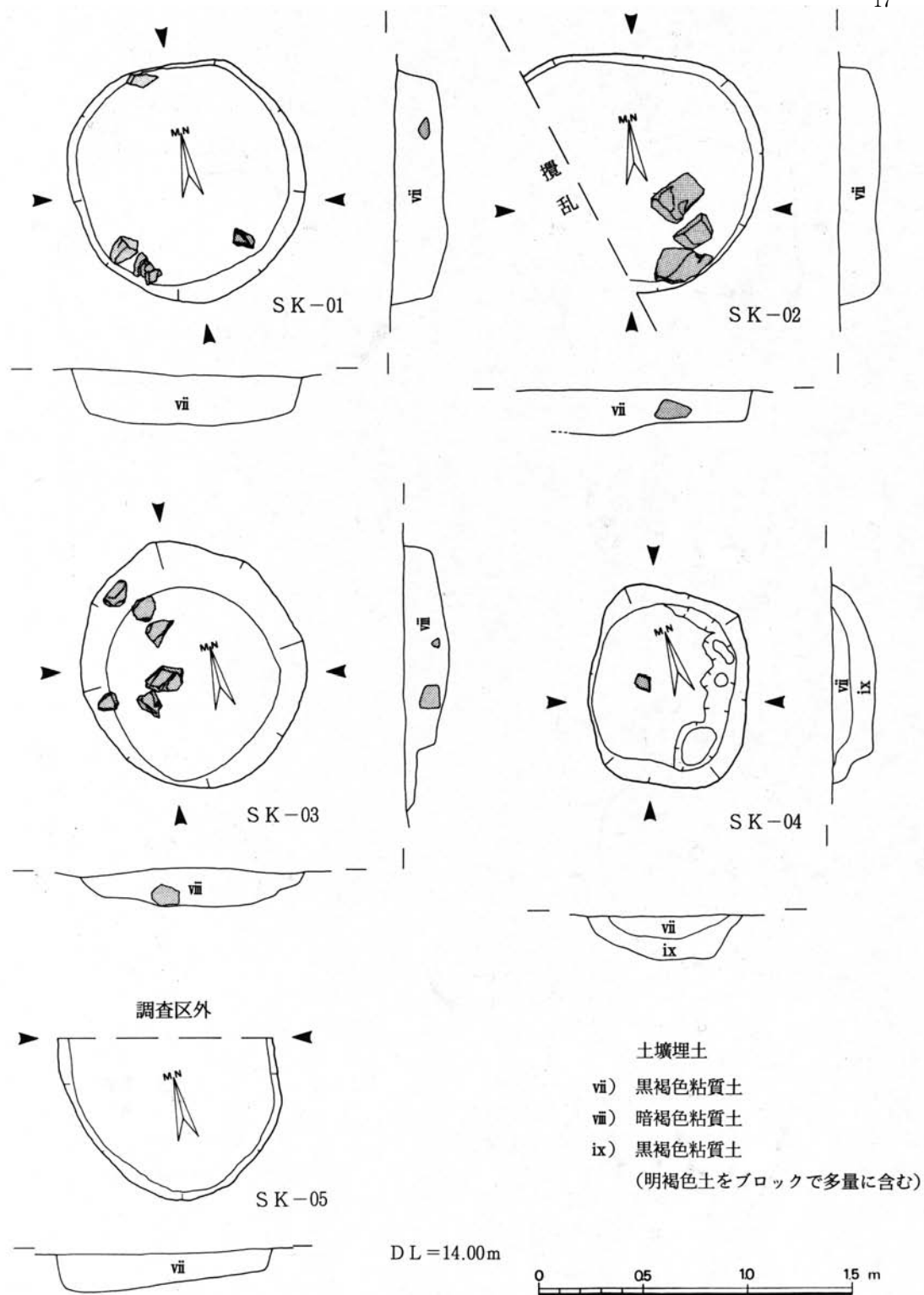


Fig. 9 SK-01～05 平面図及び断面図

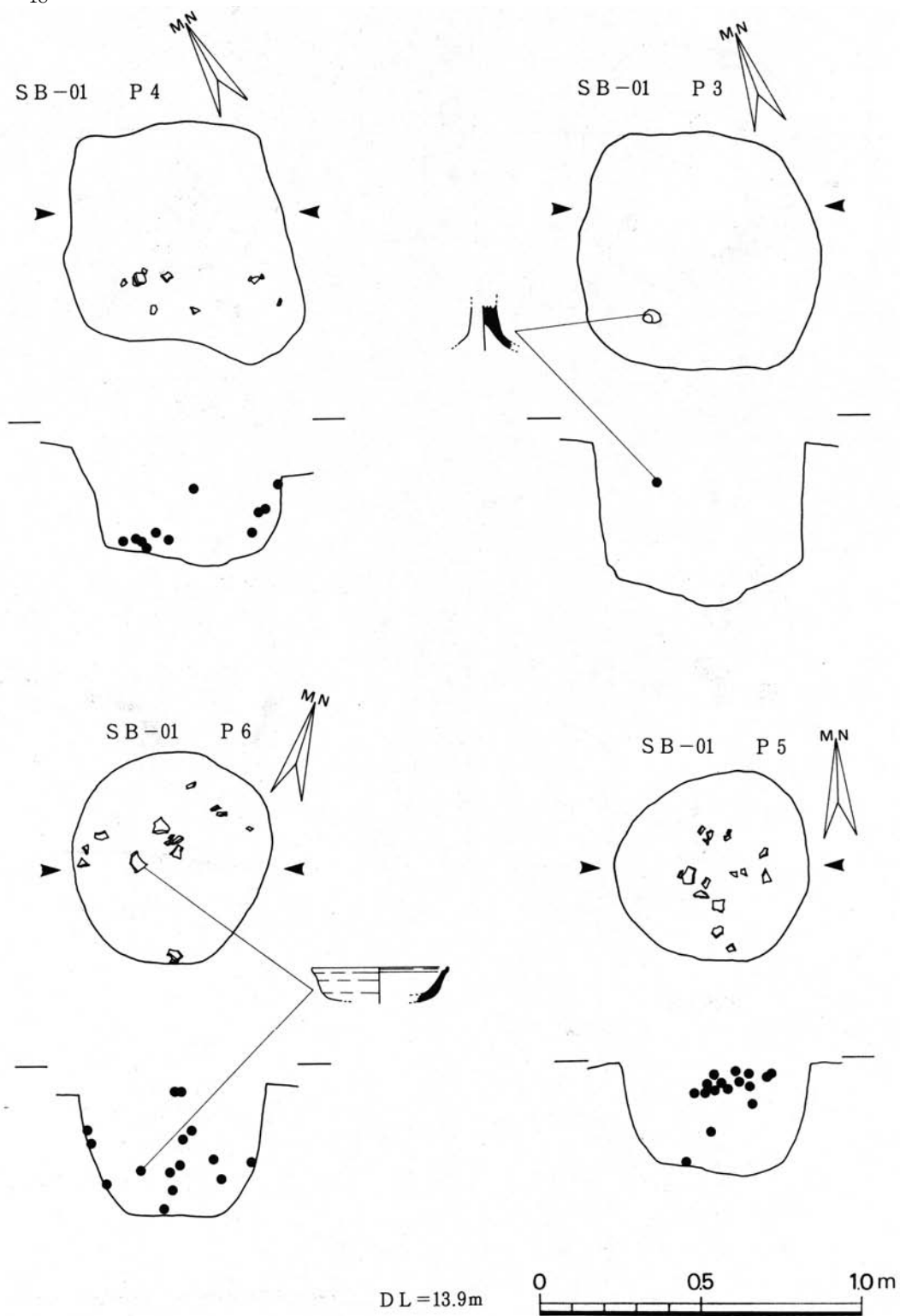


Fig. 10 遺物出土状況図及び垂直分布図

3. 出土遺物

出土した遺物の総点数は573点である。その内訳は弥生土器349点（60.9%）、土師器204点（35.6%）、須恵器18点（3.1%）、備前焼2点（0.3%）、白磁1点（0.2%）となり、全て破片での出土であった。これら遺物の中で時期と器種の判別ができるものは、弥生土器の壺1点、甕2点、高杯1点、土師器の皿3点、杯1点、高杯1点、須恵器の甕2点、土鍋2点、羽釜2点、備前焼の甕1点、中国産の白磁1点であり、以下それらの内いくつかについて詳しく述べる。

弥生土器 (Fig. 11 図1～3)

1は壺の頭部である。外面に3条の沈線と刷毛調整を、内面には撫で調整を施す。2は高杯の脚部である。「ハ」の字状の形態を示し、裾部で大きく開くが端部は欠損しており不明である。外面に5条単位の刷毛調整を施す。3は甕の口縁部である。頸部は「く」の字状に外反して口縁部に至り、口縁端部は下方に肥厚して外傾する面をなす。外面に右下りの刷毛調整を、内面には横方向の刷毛調整を施す。

土師器 (Fig. 11 図4・7～11)

4は高杯の脚部である。上部から緩やかに外下方へ開き、裾部で更に大きく開く。内面に絞り目が見られる。7は回転台成形による皿である。内外面に丁寧な撫で調整を施し、口唇部内面には浅い凹線を留める。尚、ほとんど剥落しているが、内外面に赤褐色のスリップが施されている。8は手づくね成形の皿である。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部の内外面に撫で調整を施し、体部外面には指頭圧痕を留める。9は回転台成形の杯である。体部は平坦な底部から直線的に外上方に立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕を留める。10は羽釜である。貼付された鐳は断面三角形を呈し、外方に突出する。口唇部は内傾する面をなす。外面は鐳の直下から上部では撫で調整を施し、特に鐳の上方から口唇部及び内面にかけては強い横方向の撫で調整を施す。11は羽釜の体部である。体部は内彎しており、この上部に鐳が貼付されると考えられる。外面に横方向の叩き調整を施し、内面には撫で調整を施す。

須恵器 (Fig. 11 図5・6)

5は甕の体部である。外面には平行する叩き目を施し、内面には円弧状の叩き目を残す。胎土中に植物繊維の炭化物を有する。6は壺または甕の体部と考えられる。外面に刻み目入りの平行叩き目を施し、内面には撫で調整を施す。

国内産陶器 (Fig. 11 図12)

12は備前焼の壺である。口縁部は頸部からやや外反しながら立ち上がり、端部で小玉縁を呈す。内面にやや粗く、外面には丁寧な撫で調整を施す。頸部の断面に接合痕が見られる。

輸入陶磁器

白磁の皿の底部破片であるが、図化し得ない。調査区北部の中世遺物包含層（Ⅸ層）からの出土である。

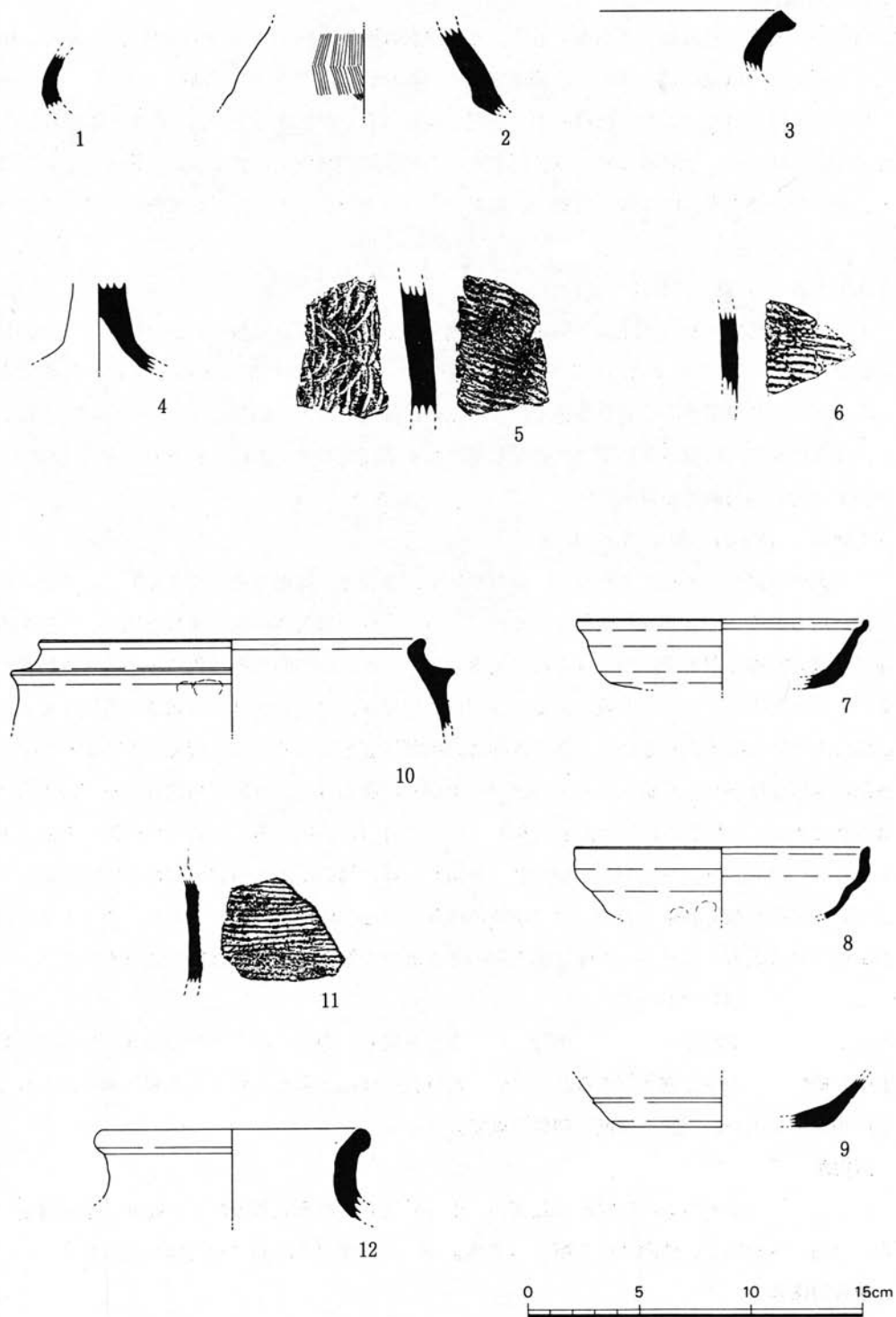


Fig. 11 出土遺物実測図

第V章 まとめ

1. 弥生時代

今回の調査において出土した遺物の60%は弥生土器であったが、その多くは細片であり図示可能なものは1～3の3点のみである。1は弥生時代前期壺の頸部であり、同形態の壺が1987年の調査時にも出土しており、田村遺跡群のLoc. 17でも出土している。

出土した弥生土器は、その胎土中に赤色チャート粒を多く含んでいる。山南川流域の東に位置する月見山山系には月見山メランジが分布し、これには赤色チャートが含まれており、又、香宗川下流域で調査された下分遠崎遺跡では、土器製作用の粘土を貯蔵したとみられる土坑も検出されていることから、十万遺跡周辺でも土器の製作が行われていたと考えられる。

尚、今回の調査直後、1991年12月に香我美町によって圃場整備事業に伴う試掘調査が行われ、十万遺跡上部の耕作地地表下1m、標高16.5mで後期土器の破片を有する包含層が確認されていることから、山南川流域の丘陵中腹における後期の集落経営を想像するものである。

2. 古代

古代の掘立柱建物に伴う柱穴は11個検出された。S B - 01を構成する柱穴は8個であり、他に1個建て替えに使用したと考えられる柱穴を確認する。他の2個はS B - 02を構成するものと考えられる。これらの掘立柱建物が使用されていた時期を確定するものは少ないものの、S B - 01のP 6から出土した土師器の皿は、その形態から「律令的土器様式」に連なるものであり、8世紀のものと考えられる。このことは、前回の調査で検出された掘立柱建物群の使用時期と合致するものであり、今回検出のS B - 01及び02も古代十万の集落を構成する建物であろう。この隣り合って存在するふた棟の家屋は、主屋と副屋の関係にあるものと考えられ、前回の調査結果を加味するとその内容も掘立柱建物と掘立柱建物、掘立柱建物と堅穴住居の組合せが見られる。各々の住居に付いて見た時、規模は20㎡程度のものから50㎡を超えるものが存在し、形態も廂を持つものを持たないものがある。これらの事柄から推すに、古代十万地域の住民に階層分化があったものと想像される。

古代十万においても、景観を特徴付けるものは条里地割と集落であったと考えられる。条里に付いて言えば、山南川流域でも香長平野部に卓越する条里地割の施工が推定されるが、今回の調査ではその痕跡を確認するには至らなかった。又、集落に付いても、その全貌を明らかにする事はできなかったものの、先述の香我美町による試掘調査では家地域の南限と考えられる溝が検出されており、今回検出のS B - 01と02は集落の南端に位置するものであり、集落の形態は1町方格に7～8棟の家屋が存在する疎塊村と考えられる。

3. 中世

中世の遺構としては24個の柱穴を検出したものの、掘立柱建物等の遺構は確認できなかった。出土遺物は、遺構内からは極く僅かであり、その多くは調査区北部の遺物包含層からのものであった。8の土師器の皿は手づくね成形であり、1987年の調査時に出原恵三氏によりD2類と分類されたものである。これと同形体のものが田村遺跡群のLoc. 42、S K96からも出土しており、時期は15世紀と比定される。9の土師器の杯は、先の分類ではB1類に属するものであり、時期は14世紀と比定される。10、11の羽釜は、形態及び調整から松田直則氏の煮沸具編年によると、15世紀の播磨型とされる。12の備前焼の壺は、口縁端部の形態より備前焼編年の第IV期に相当し、15世紀のものと考えられる。以上、中世の出土遺物を見るに、その時期は14世紀から15世紀のものが主である。これは、当時存在した十万城及び東十万城との関連を考えるに難くない。

今回の調査区域は幸い破壊から免れ得た部分であり、遺構の残存状況も比較的良好であったが、調査範囲が狭小であったことから、成果も甚だ僅少なものであった。加えて、稚拙な筆者の知識では資料の解析も不十分であったことを痛感する。できれば次の調査資料が新たな問題を提起することを期待する。

参考文献

古代の条里地割及び村落形態について

1. 金田 章裕『条里と村落の歴史地理学的研究』大明堂 1985年
2. 大脇 保彦「土佐の条里 -その復元再考と補説-」『高知の研究 2』清文堂 1983年

集落内の形態について

3. 広瀬 和雄「古代の農村」『日本村落史講座 2 景観Ⅰ』雄山閣 1989年
4. 石野 博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館 1991年

大忍郷・大忍庄について

5. 横川 末吉「大忍庄の構造 -安芸文書を中心として-」『高知の研究 2』清文堂 1983年
- 「律令の土器様式」について

6. 西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986年

その他

7. 高橋 啓明・出原 恵三・吉原 達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1987年
8. 出原 恵三・高橋 啓明『下分遠崎遺跡（Ⅰ）』 〃 1989年
9. 『田村遺跡群 第10分冊』高知県教育委員会 1986年
10. 松田 直則「土佐の古代末から中世の煮沸具について」（第3回四国中近世土器研究発表会資料より）1991年

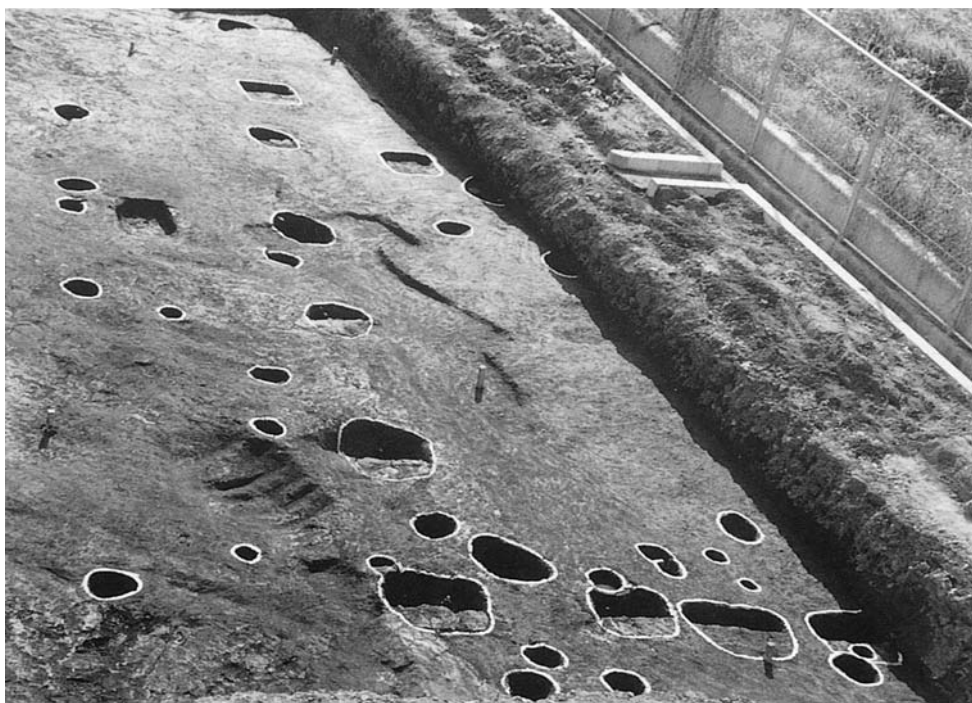
圖 版



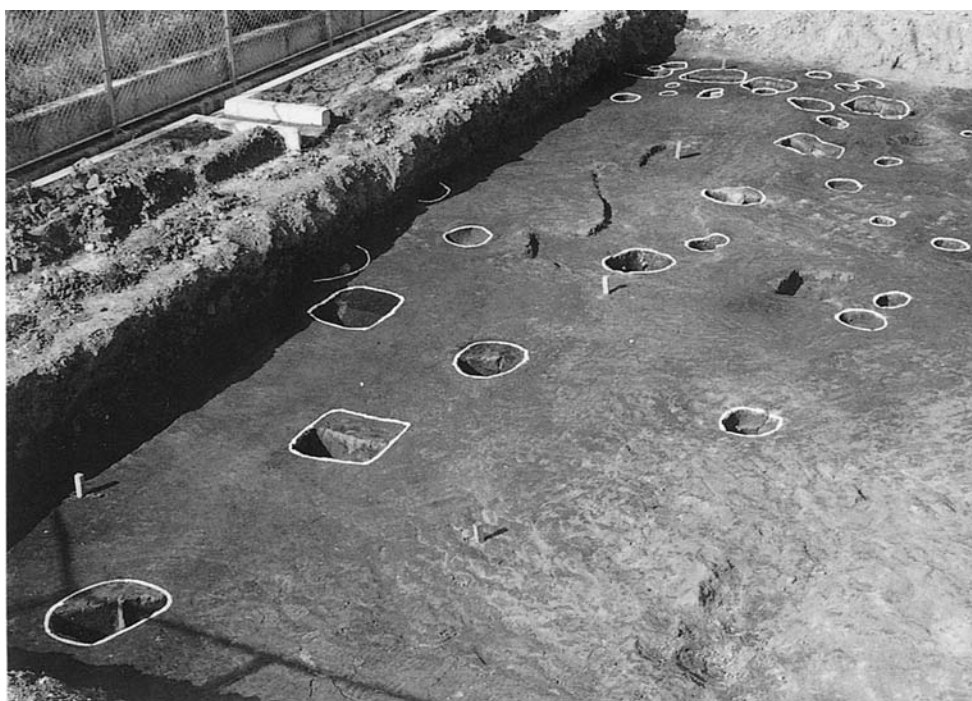
西壁セクション



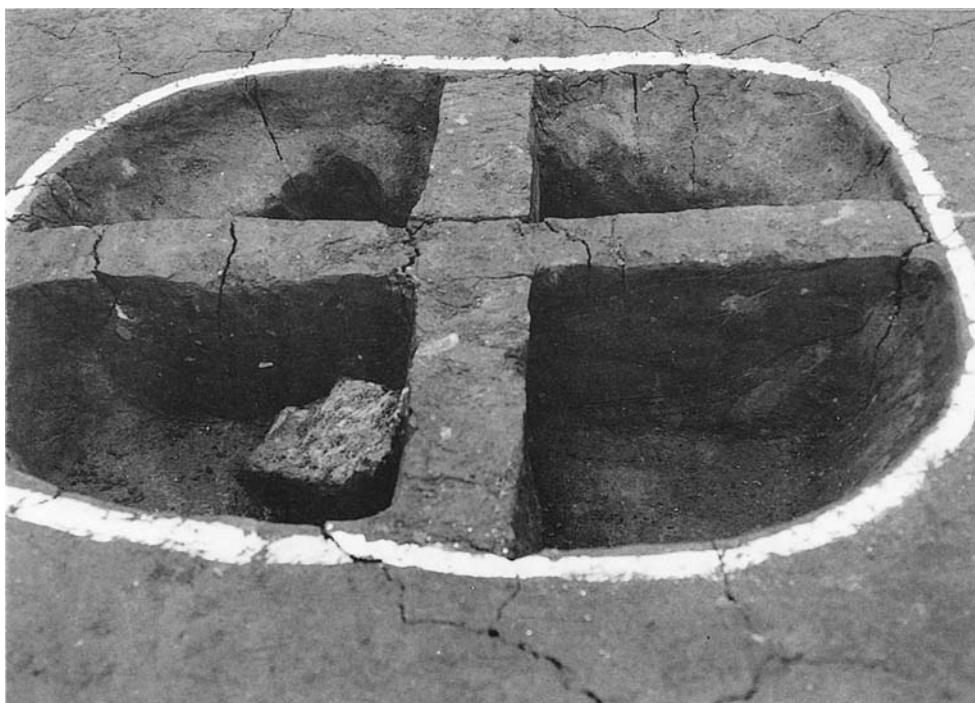
南壁セクション



S B - 01 (北より)



S B - 01 (南より)



S K-04 セクション



S B-01 P2柱根



S B -01
P 1
セクション



S B -01
P 2
セクション



S B -01
P 3
セクション



S B -01
P 4
セクション



S B -01
P 5
セクション



S B -01
P 7
セクション

PL. 6



S B -01
P 8
セクション



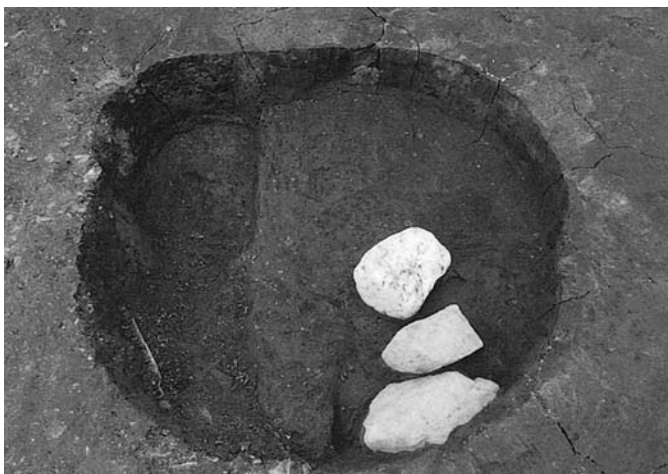
S B -02
P 1
セクション



S B -02
P 2
セクション



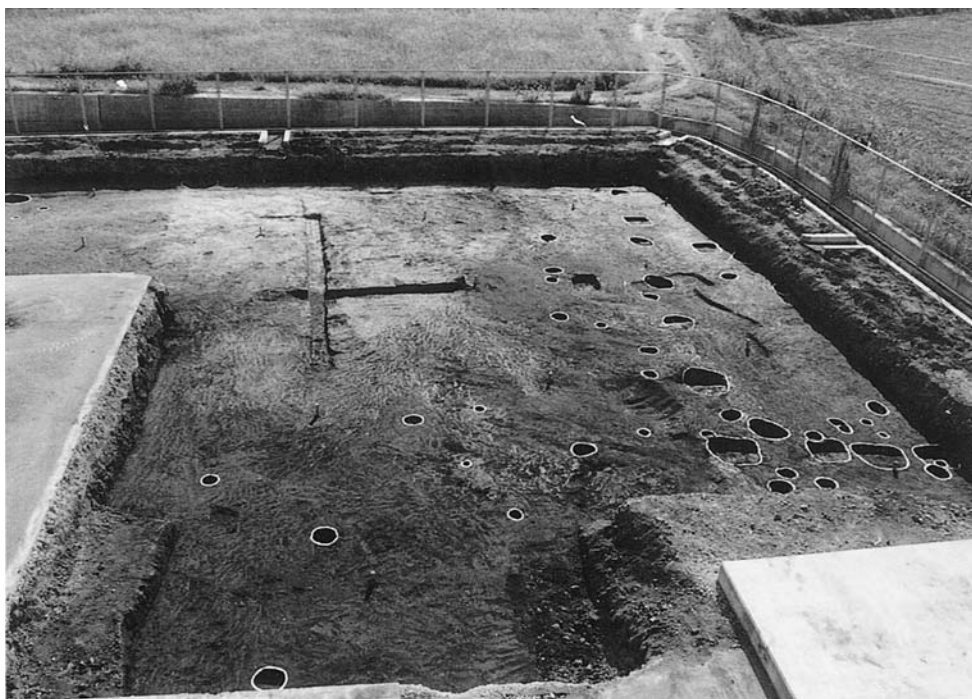
S K -01



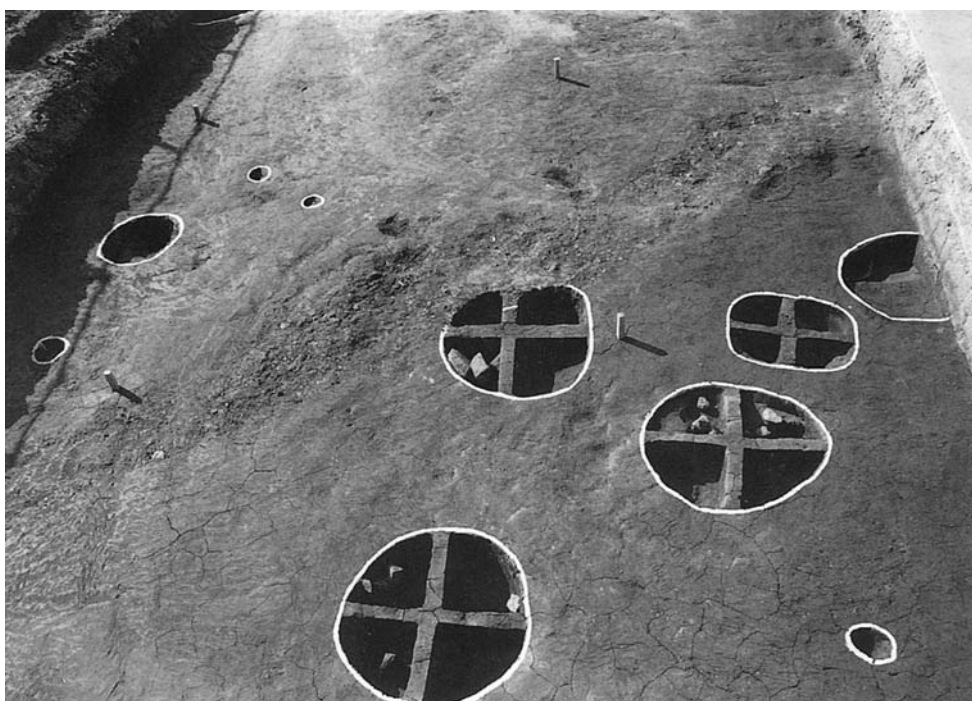
S K -02



S K -03



調査区全景（北より）



S K - 01 ~ 05



調査区全景（東より）



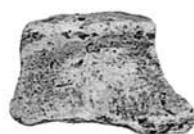
発掘作業風景



1



2



3



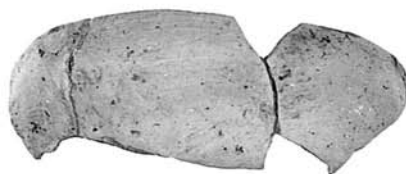
4



5



9



8



6



7



12



10



11

付図 1. 十万遺跡 縄文時代～古代遺構全体図 (S = $\frac{1}{200}$)



付図 2. 十万遺跡 中近世遺構全体図 (S = $\frac{1}{200}$)



高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第4集

十 万 遺 跡 Ⅱ

高知県経済連LPガス容器検査所建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1992・3

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
TEL 0888-64-0671

印 刷 川 北 印 刷 (株)